プロ・ライフ・ムーブメント
1995年9月 No.59

PRO-LIFE NEWS

（中絶に反対する運動）
〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

『養子を取ろう』

子どもを養子に取ること。生命擁護家のできる最も困難で終わりのない仕事です。多くの生命擁護家たちが養子を取っています。子どもを養子にもらうか、養子が欲しくてもその費用をまかなえない人達を経済的に支援するかのどちらかをあなたもチャレンジするようにと勧めます。そうしなければ子ども達は家庭を持つことが出来ないのです。

まず一つ目の選択肢、養子を取る事を考えてみましょう。あなたは独身でも既婚者でも、二十歳から六十歳の間なら子どもを養子にできます。斡旋所によっては異なる条件を示してきますが、もし本当に養子が欲しい場合、子どもを世話してくれる斡旋所を探せます。しかし、やはり養子をもらうのは困難であると思われるでしょう。確かに時間がかかり、ストレスもたまりますが、困難ではありません。でも、高い費用を要する場合もあります。そこで二つ目の選択肢が出てくるのです：養子が欲しくてもその費用をまかなえない人達を支援するのです。自分達の心と家庭の中にもう一人の子どものための場所を見つけ出すのです。養子縁組のための初期費用、就学費用、周旋費用、そして交通費等の支援です。

では支援する家族をどのようにして探せばよいのでしょうか？もし各教会が子どもを養子にする事を一つの家庭に勧める計画を行い、さらにその費用を教会が払うとしたらどうでしょう？教会のメンバーが全て参加できます。

五年ほど前、兄夫婦の間にはすでに六人の子どもがいました。彼らは、もし自分たちが本当に生命擁護家ならば、養子を取る事を考えるべきだと、フィリピンから十五歳の孤児の男の子を養子にしました。その後、社会事業相談員がある幼児を養子にもらってくれる家庭を探してたので、その子もまた養子にしました。そして義姉はさらに二人の子を出産し、現時点で合計十人になりました。騒がしい集団です。

そして、私は、一九九〇年の三月、膝のところで足を切断されたジャマイカの女の子の写真をある雑誌に見つけました。彼女はリハビリセンターで生活しており、元気で聡明で感受性の高い子であると書いてありました。彼女はカメラマンを好奇心と恥ずかしさとが混ざったような眼差しで見上げていました。

心の中で何かが「この子はあなたの娘ですよ」と言っていました。でもその時は、「これは感情的なものだ。もちろん、この子は私たちの家族にとけ込むと思うけど、一体ジャマイカから養子をもらえるだろうか？第一この子は養子縁組の対象になっているのだろうか？ジャマイカ政府は私達に黒人のジャマイカの女の子を養子に取らせてくれるのだろうか？義足の費用は？」。私は他にも色々な質問をし、結局冷静になる事にしました。私は全ての行動を三ヶ月間我慢しようと決め、きっとその頃にはケイ・マリーを忘れてしまっているだろうと思いました。

三ヶ月たってもまだ私は彼女を思っていたので、夫に話したところ、彼は私達が感情的な反応で行動を起こすべきでないとあらゆる論理的な根拠を述

べました。私はさらに三ケ月待つ約束をしました。それでも結局、私は彼に手紙を書かせてくれるよう頼み込みました。

一九九三年の六月二十一日、私はジャマイカに飛び、初めて自分の娘ケイ・マリーを腕に抱きました。補綴科関係は無料でシュライナース病院（Shriners Hospital）で扱ってくれることになりました。彼女は私達の家族にすっかりとけ込んでいます。彼女は私の娘なのです。彼女のいたモナ・リハビリ・センターでは、他にも家族を持たない身体に障害を持っている子どもが5人います。ジャマイカ政府は障害を持っていない捨てられた子ども達に十分に家庭を与える事ができていません。障害を持っている子ども達に対してなどは家庭を探してあげようともしていません。

これらの待っている子ども達の一人を自分の家族に受け入れられるように祈ることができますか？養子を欲しがっている家族を支援するための基金を自分の教会で始めることができますか？

「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのはわたしにしてくれたことなのである。」とイエスは言われました（マタイによる福音書25：40）。誰にも欲しがられないこれらの子ども達、彼らが最も小さい者達なのです。この小さい者達の一人に、神と家族について教えてあげれませんか？

神はあなたに何を望んでいるのでしょう？その事について祈ることができますか？子ども達のために祈ってあげれますか？そして、もし聖霊があなたの心に語りかけてきたなら、行動しますか？

中絶についてのもう一つの考え方

私の体験談を話す前に私は正看護夫（RMS）であるとして人工中絶の倫理上の目的を以下に述べます。

周知のように、キリスト教会の間では人工中絶は個々の人間を創造される神の意思に反するものであり、困難な状況下での中絶が許されるとすれば「そのような状況を否定する意見もあるが」、それは極めて深刻な理由による場合に限る、という基本的な合意があります。

この問題に対して、なぜローマ・カトリック教会は最も厳格な態度で臨んできたのでしょうか。それは、米国の司教による重要な声明（『カトリック司教協議会』、一九七四年）とともに、信仰宣言のための修道会が一九七四年発表した、『中絶に関する声明』の中に最も権威ある答えを見出す事ができます。これらは、中絶を嬰児殺しとみなした第二回ヴァティカン公会議による中絶への非難を詳細に述べたものです（『現代世界における教会』一九六五年）声明は以下の通りです。

「人間にとってまず第一の権利は、生きる権利です。人には他にも大切なものがあり、中にはより貴重なものもありますが、生きる権利は基本的なものです。そのため、何にもましてそれは守られなければなりません。社会も公的権威も、どのような形ででもこの権利を、相手によって認めたり認めなかったりするべきではありません。人種や性別、肌の色や宗教など、いかなるものに基づくものであれ差別は悪です。この権利は公の承認によって成立するのではなく、権利が承認に優先するのです。つまり、この権利の承認は必要なものであり、それを拒絶することは不正であるという事です。職種に基づくいかなる差別も、他の差別同様正当化されるものではありません。生きる権利は、たとえとても弱っていても、年老いた人にもあります。また、回復の見込みのない病人についても同じです。

「生まれたばかりの赤ちゃんの生きる権利が、成人のそれより軽視されてはなりません。実際人命の大切さは、人類始まって以来ずっと唱えられてきました。卵子と精子が出会ったその時から、父親のものでも母親のものでもないひとつの生命が始まるのです。それはむしろ独自に成長するひとりの新しい人間の人生なのです。それ

が既に人間でなければ、それ以降人間になる事もないでしょう。

この文書は、啓示された真実について教会が示した最も信頼できる判断であり、教えの効果に重きをおいています。その上、扱っている問題が長い間論議を尽くしてきており、また医学上の進歩が、教会の立場を弱めるどころか逆に補強し鮮明にしてます。

「女性が決断する権利」

もちろん世の中には、中絶するよりも出産した方が良くない結果をもたらす「母親だけでなく他の人々にも」と妊婦が心底信じている場合も大いにあります。このことは、ある中絶クリニックでの女性へのインタビューを通して、大変微妙な言いまわしで文書化されています（マグナ・ディーンズ一九七六年）。その中で、女性が自分自身のために決断する権利に好意的に述べた部分を以下に示しましょう。

1・女性は、妊娠、出産、育児のリスクと重荷に耐えなければならない。それは自ら選択した事でなければ耐えられないほどの負担である。

2・人生経験のまだ少ない年若い女性、あるいは知恵遅れの女性の場合、または近親相姦やレイプの場合、女性には妊娠に対する責任がほとんどあるいは全くない。

3・人はセックスに責任を伴う。しかし、避妊して失敗すれば、最後の手段として中絶をする権利がある。

4・女性が望まない子どもを生むことは、女性自身だけでなく子どもにとっても悲劇である。なぜならどんなに努力しても、女性は子どもが必要とする心理的な環境を与えてやる事ができず、自分の心の緊張のせいでやがて育児放棄したり子どもを虐待するようになるからである。

5・子どもに障害がある場合、特に遺伝的な欠陥があるとわかった場合は、生まれても障害に苦しんだり、社会の負担になる子どもを生まない義務が女性にはある。

6・女性は、望まない子どもの世話のために社会に頼るべきではないし、また養子に出すべきでもない。そのような手助けは不適切である事が多く、状況を悪化させる。

7・女性は、違法で恐らくは危険な中絶医による中絶を強制されるべきではない。それは生命の危険や将来不妊症を引き起こすリスクをはらんでいる。

8・現代の女性は、深刻な問題である人口のコントロールに貢献すべく、避妊に失敗したり避妊できなかった場合の手段として、中絶を行う事ができる。

9・プロ・チョイスの女性は中絶する権利がある。宗教的価値観を他人に押しつけたり、中絶を選ぶ人に罪悪感を植え付けたりしてじゃましないで欲しい。人によって、この中絶を選択する権利を阻まれてはならない。

「胎児の生きる権利」

これらの母親の「権利」を同情的な立場で認めるにあたっては、同情と正義が等しく与えられるよう子どもの生きる権利についても議論する事がもっとも大切です。また、中絶を認めた場合起こりうる結果についても考えておかねばなりません。

1・中絶を選択する場合、母親はある一人の人間を消滅させる事で自分の権利を守ろうとしているのであり、それは大変間違った事で、人としてのモラルに反する行為である。確かに女性は妊娠により、体内に別の人間が存在するという独特の状況におかれるわけだが、これによって女性が受ける害は「極端な場合を除いて」それほどひどくなく、その治療方法を見つける事もできる。それに対して胎児は、生きる権利を完全に失い、その治療も不可能である。

2・困難な場合、中絶をよしとすれば、それより安易な状況での中絶もより広く世間に浸透させる事になるから、困難と思われる

場合でも小さい生命も生きる権利を持っているから、女性は頑張らなければならない。

3・社会は、女性に自分や他人の子どもへの愛情と関心に反して行動するよう促し、強制さえしている。しかし、これを信じることは間違っている。まだ、産まれていない子供も生きる権利がある事に気づけば、女性としての自尊心が落ち苦しまなければならなくなる。

4・中絶という手段は、父親を妊娠に対する責任、子どもや妻を支えてその負担を共に分かちあう責任から排除している。そのため彼もまた人間として堕落し、葛藤を背負い込む事になる。

5・未婚の女性、障害者の女性、そしてレイプや近親相姦の被害者は、社会の保護を受ける権利がある。しかしながら、社会はその義務を単純に中絶を押し進める事だけで果たそうとしている。社会福祉手当を増やすまいとして、貧しい女性に中絶をすすめてその家族を育てる権利を無視している事でも、同じ事が言える。

6・中絶によって、神様からの贈りものとしての親や子供の価値が損なわれれば、社会の基礎である家族の絆はより弱くなります。中絶が広く行われる事で、親として責任ある態度をとるようになるとはいえません。むしろ結果を避けるための安易な方法を与え、無責任な態度を助長する事になります。ですから、人口抑制には効果的に見えますが、中絶は全世界における長期的問題に対する堅実な長期的解決法ではないのです。

7・簡単に中絶できる事は他人に対しての考えが経済的な価値観によって決められ、主観的な幸福感に基づいて人を評価するような考えがだんだん広まってきている。しかしこの考えは人間の価値と民主主義のこの世ではかけがえない権利の発達に逆行するものではないか。それでは、中絶に関するこれらの多くの長所・短所のバランスを保ち、これ以上功利主義に陥らないようにするにはどうしたらよいのでしょうか。リチャード・マコーミックが認めた通り（一九七三年）、何の罪もない人間を死に追いやってまで得るものが、その人間の基本的な生きる権利と等しい価値を持っているとは考えにくいのです。母親の権利と子どもの権利が同じ土台の上、つまり母と子が平等で、社会がそれを守るのは当然であるという考え方に立っているのであれば、なぜ母親や社会の権利の方が子どものそれより重要であるといえるのでしょうか。

母親の権利がいかに確固たるものであるにせよ、子どもへの悪影響がより確実に即時に現れるものだということは、明白な事実です。このように、中絶の問題において柔軟な対応をとる事は、罪無きものを殺す事が本来悪であり、どんな例外も認められない事を基本とする従来の立場を想起させると共に、より本質的な子どもの生きる権利をも私達に改めて考え直させるのです。

「結論」

これまでの議論から、実際に医療に携わる人々に対してどのような結論が導き出せるでしょうか。以下に掲げる規範は、一九七三年のカトリック司教協議会の際、提議された司教教書によるもので、様々な状況においてどのように行動するべきか決めるのに役立つでしょう。

1・カトリックの病院は、中絶手術を行うよう要請する法には従わない。

2・中絶手術を行う施設で働いているカトリックの医師、看護婦、及び医療関係者は、自らの良心に従ってそのような過程に協力しない。

3・中絶を行う病院で働いている医師、看護婦、及び医療関係者は、自らの良心に従ってそのような活動には関与しないことを書面で病院に通知する。

スティーブン・ヒューム神父

中絶法

カトリック教徒のとるべき立場

『中絶の公認とは、生まれる前の子どもの命の権利への国家による侵害である』

人間の命の権利とは、自然法と神による法に基づく侵害不可能で基本的な原理です。

人間の尊厳と命の権利は、受胎したその瞬間から始まり、守られなければならない基本的なものです。つまり中絶を許す法律の制定は、人間の命が持つ正義の根本的な権利の要求と対立し、基本的な人間の権利への侵害です。

中絶を公認しようとする政府は、無垢で無防備な生まれる前の子どもの命を侵害する権利を人々に与える事になります。人間の権利は国家と共に存在する訳ではありません。例え、社会の多数派によって何かが合意されても、政府がそれを権利だと主張する事は出来ません。

基本的な人間の権利の中でも命の権利は神から授ったものです。生きる権利は人間として基本的な権利だから、国家も親も、その権利にとやかく言う事は出来ないはずです。このことからわかる様に、中絶を公認するという事は、不合理であるだけでなく、侵害の行為でもあるのです。

CL.1/95

生命・・なんと美しい選択

私にとって、人生は選択した結果ではなく、贈り物です。私は赤ちゃんの時、今の両親に養子として引き取られました。その数年前には、兄と姉がやはり養子として引き取られていました。そして私が来て三年後、弟のマーカスージョン（現在十歳）が引き取られました。私の生みの母は、人間関係や情緒面で多くの問題を抱えた人でした。私には血のつながった兄弟姉妹がいますが、よそで暮らしています。これまで会ったこともないし、これからも会うことはないでしょう。

母が私を妊娠した時、難しい局面に立たされていました。おそらくお腹の私をおろそうと考えたこともあったと思います。しかし、おろす代わりに、母は私を産んですぐに養子に出す決意をしました。母をひどい人間、愛情のない人間として、軽蔑する人もいるかも知れません。けれども、母はどんなに具合が悪く、憂鬱で、怒りを感じても、私を産むことを選んだのであり、それが私の今の両親への贈り物だったのです。

私以外の三人の兄弟も、みな似たり寄ったりの事情があって、実の両親が中絶よりも産んで養子に出すことを選んだのでした。

私には、今ここでこうして作文を書いている以外の自分を想像できません。まわりの友達や家族のいない自分なんて考えられません。兄のマットがいなければどうしたらいいのかしら。彼は本当にいい兄なのです。それに姉のマーゴがいなければ、自分の物以外の服を借りる相手がいません。弟のマーカスージョンには時々いらいらさせられますが、彼がいなければ私が姉貴面できる相手がいなくなってしまうでしょう。私達兄弟がお互いに血のつながりがなく、また両親とも血がつながっていないことは知っています。でも、私は姉や兄弟をこれ以上愛することができないほど大切にしています。

私と同じ年頃の子どもが彼らの実の両親に対してどう感じているかわかりませんが、私の両親は至極普通で標準に思えます。私の趣味に対しては時に厳しくなりますが、十四歳になるまでに彼らを納得させられる自信があります。いつかはお互いに解決することができるでしょう。

考えてみれば、努力して問題を解決することこそが真の選択といえるでしょう。両親はいつも私を

大切な贈り物として扱ってくれます。生みの母を、私を自分達に与えてくれたすばらしい人だと言い、私も母が中絶しないで産んでくれたことを喜んでいます。ですから私の人生は選択ではなく、特別な贈り物だったと信じてるのです。

ミーガン・モントゥーリ

「ミーガンさんは十三歳。この作文は学校の宿題として書かれた。」

選択

五十四年前、私の母は私を養子に出して、手放しました。つい最近、私は彼女を探し出しましたが、見つかったのはお墓だけでした。たとえ彼女が私を手元に置いておけなかったにしても、私に命の贈り物をしてくれたのに彼女に感謝できないのが残念です。近頃中絶賛成の議論を耳にすると、私の中の強い感情がかき乱されます。なぜ女性は自分の中にある命を、尊重できないのでしょうか？何故その人は、私の母が私にくれた様な生きるチャンスを、赤ちゃんに与えられないのでしょうか？

この五十四年間で多くが変わりました。私は理解する事が出来るけれど賛成できません。神の指導を認めず、人は自分の考えしかないのです。私は何人かの、同じキリスト教信者である人達の、中絶に対する態度に、特にびっくりさせられます。悲しい事に彼等は、その影響や重大さを無視して、合理化してしまおうとする考察に、引き込まれているのです。「もし法律がないのなら、破りようもないわ。」「もし中絶が罪でないのなら、中絶しても罪の意識に悩まされる必要はないわ」「もし私の中の産まれる前の赤ちゃんが人間でないと思えば、赤ちゃんを中絶しても私は殺人者ではないわ。」「もし私が完璧を唯一の基準とすれば、欠陥を持つ赤ちゃんを産まれる前に殺しても私は正当化されるわ。」

予言者イザヤは、この事を二千年も前に言っています：「災いだ。悪を善と言い、善を悪という者は。彼らは闇を光とし、光を闇とし、苦いものを甘いとし、甘いものを苦いとする」（イザヤ書5章20節。）

キリスト教信者の何割かは、自分達は決して中絶しないけれども、ほかの人達がそうする権利を奪うのはよくないのではないかと思う、と言うのを耳にします。私にすれば、それは「私は決して人を殺さないけれども、あなたの殺す権利を奪いたくない。」と言っているのと同じです。

中絶は殺人です。殺人でない、と偽れば、中絶が増えるのを助長する事になりませんか？人々が中絶しやすくなるのを助長する事になりませんか？「彼等を火の中から引き出して救ってやりなさい。又他の人達にやさしくする事で彼等が神を見つけるのを手伝いなさい。しかしあなた達が彼等の罪に引き込まれないように気をつけなさい。」（ユダの書1章23節）と私達は警告されています。

私達の教会のいくつかは、懺悔されない罪の為に弱くなってしまったのでしょうか？イザヤは「こうして私の顔を仰ぎ見に来るが誰がお前達にこれらのものを求めたか、私の庭を踏み荒らす者よ。お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても決して聞かない。」（イザヤ書1章12～15節）と書いています。

キリスト教信者の皆さん、神が贈って下さる子ども達は、私達にとって最も素晴らしい祝福のひとつです。詩篇127章の中で、子ども達は神からの贈り物だと言われています。（詩篇127章3節）近頃、アメリカの最高裁判所は、このような産まれる前の貴重な宝物の殺人に対する保護を探し求めている人々の希望を、打ち砕いてしまいました。政府の協力を得ようとする私達の戦いに、私達はどうやら敗れたよ

うです。私達に残っている唯一の手段は信念です。中絶が罪である事を認めましょう。神が、罪人としての私達に対して慈悲深く、私達を導いて下さるよう、祈りましょう。私達は他の人々がついて来るように、キリスト教信者としての見本を示さなければなりません。申命記では「わたしは今日、天と地をあなた達に対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るように」（申命記30章19節）と言われています。私に命をくれた事で、母の犠牲がどうだったか全くわかりません。でもこの贈り物を、私は永遠に感謝し続けます。

ルース・マーティンソン

Celebrate Life 1-2/95

聖書が道徳上の善悪の基準を示している

苦しんでいる人たちが苦痛に耐える手助けをすることは、現代の教会員たちにとって困難な課題です。しかし、社会によって引き起こされた善悪の問題はそうではありません。私たちに対する神の命令ははっきりしています。神が罪もない人間を殺すことをお許しにならない事を、私たちは知っています。子どもを中絶し、その子どもの臓器を使うことは悪いことです。赤ん坊が生きるのに必要な資質を充分に備えていないと誰かが決定したという理由で、また、赤ん坊が長くは生きられないだろうという理由で、赤ん坊を殺して、その臓器を移植のために使うことも間違っています。すべての人間の生命は神にとって大切なものなのです。

臓器移植のために意図的に人間を殺すことは、偶発的な流産や早産の場合とは全く異なります。一九八七年に移植に関する論文で、J・C・ウィルキー医師は、夫を愛し世話をした妻が夫の死後彼の身体を移植に使うことは妥当だけれども、妻が夫を射ち殺した場合には、その行為によって彼女は臓器提供に関する決定をする道徳的な権利を失うことになると書いています。同様に、中絶された赤ん坊の母親は殺人に関わっているので赤ん坊の臓器を移植に使うことを認める権利はないのだと彼は断言しています。しかしながら、赤ん坊の命を救おうと努力したにもかかわらず偶発的な流産や早産で子どもを失った母親によって同じ決定をされたものなら、それは道徳的な問題は全くありません。

ウィルキー博士は、「臓器を得れば、他の人の命を助けれるからともっともらしい言い訳をつけて一人の患者を殺してはいけない「そのよいこと」が、罪のない胎児を殺すというような不道徳できわめてひどく悪い行為によるものであるという事実から私たちの注意をそらすために、移植のための臓器の確保という、「なにかよいことをしている」、という言い訳をしてはいけない。」と結論づけています。

神の世界では、「終わり良ければすべてよし。」ということにはなりません。ウィルキー博士の言葉はどんなに小さく弱い人間の命も神にとって尊いものであり、罪のない人間を殺すことの境界は、理由のいかんにかかわらず、それを超えてはならないものだとする聖書の観点を示したものです。

Pres-PL,winter/95

教会の指導者の方々へ

なぜ大多数の教会が、妊娠中絶の問題に取り組まないのでしょう。私はこのことを、教会の指導者の方々に質問したことがあります。その時の答えで最も多かったのは、以下のようなものでした。

1、教会の指導者はもめ事を避けたいと考えている。
2、妊娠中絶の問題に取り組むと、中絶経験のある教会メンバーが来なくなってしまうのではないかと恐れている。
3、妊娠中絶の問題に取り組むと、教会への経済支援が減るのではないかと恐れている。

ところで、キリストは中絶に対してどのように対処されるでしょう。教会のメンバーの数を維持するために、もめ事を避けるでしょうか。また、お金のために生命を犠牲にするでしょうか。

我々はキリストがされるようにするべきでしょうか、それとも神の意志から離れて独自の道を進むべきでしょうか。聖書の教えに従い、神の根本方針と指導に従うべきでしょうか。中絶が、考えたくもないくらい不愉快で、その現実をテレビで放送できないほど恐ろしいもので、公の場には到底持ち出せないほどおぞましいものだとするならば、なぜ日本のキリスト教会は、毎日五千人もの無防備な、罪のない子どもが中絶されるのを黙認しているのでしょうか。

どうか自分の胸に手をあてて、聖霊が何をなすべきだとあなたと教会を導いてくれるように祈って下さい。

Celebrate Life 1-2/95

子宮内の生命についての聖書の言及

旧約及び新約聖書の筆者たちは、胎児に宿る人間性について認識していました。聖書には、子宮内の生命の存在、その成長、その独自性についての記述がたくさんあります。以下に挙げる抜粋は胎児の一人一人が人間であるという聖書の積年の信念を立証しています。

1　子宮内の生命の存在

聖書では、胎児の骨に言及し、胎児を子どもとして扱っており、胎児を人間として認めています。

子宮内の骨：（コヘレットの書11章5節）【あなたは母の胎内で、骨の中にどうして生命の息吹が入るかを知るまい。同様にすべてをつかさどる神のみ業を知ることはできない。】

子宮内の子ども：（創世の書25章22－25節）【ところが胎内の子がぶつかり合うので、彼女は「こんなことでは生きていられません」と言って、主におうかがいを立てにいった。すると、主はこう仰せられた。「おまえの胎内には二つの民がいる。おまえから出る二つの民は、離れ去る。一方の民は他の民よりも強く、兄は、弟に仕えるだろう」。産み月になってみると、胎内の子は双子であった。はじめの子が生まれたが、その子は赤毛で、毛衣のように毛深く、エザウと名づけられた。】

2　子宮内の生命の成長：イザヤの書、ヨブの書

旧約聖書のいくつかの箇所に、子宮内の生命の成長について言及しているところがあります。子どもが大人へと成長していくのと同じ様に、子宮の中の男女の胎児も子どもへと成長していくのです。以下にその旧約聖書の箇所を抜粋します：

イザヤの書44章2節【母の胎内からおまえをつくったつくり主、救い主なる主は仰せられる、「私のしもべ、ヤコブ、私の選んだイシュルンよ、恐れるな。】

ヨブの書3章15節【私を胎内で形造られたお方は彼らをも造られたではないか。その神がわれらを胎の中で形造られた。】

イザヤの書49章1、5節【主は母のふところから私を呼び、母のふところか

ら、私の名を記憶された。】【私は主のみ前に光栄を受けた。神は私の力だった。ヤコブを連れもどし、イスラエルをみもとに集め、そのしもべとするように、母のふところから私をつくられた主は語られ、こう仰せられた。】

3　個々の生命の創造：エレミヤの書、詩編

聖書では、子宮は生命を保護する聖域と考えられています。個々の生命は他に代わるもののない独自の創造物ですが、中絶されるとそれは暴力で中断され、不自然な終わり方をします。以下に挙げる旧約聖書の箇所では、子宮に宿る生命が独自の創造物であると述べています：

エレミヤの書１章５節【おまえを胎内につくるより先に、私はおまえを知っていた。母のふところから出るより先に、私はおまえを聖別し、国々の予言者と定めた。】

詩編１３９編13節、15～16節【あなたは私の腎をつくり、母の胎内に織りこまれた。】【私の骨はあなたに隠されていない、私がひそかにつくられ、地の深みでぬいとりされたとき。あなたの御目はすでに私の行いを見、それらはあなたの書の中にあって、日々が記され、集められた、一日さえもまだなかったのに。】

4　新約聖書における胎児の人間性についての言及：ガラツィア人への手紙、ルカによる福音書

新約聖書にも、子宮内の胎児の個々の人間性について言及している箇所があります。以下に挙げる新約聖書の箇所は、胎児の人間性に関する記述です。

ガラツィア人への手紙１章15、16節【けれども母の胎内から私を選び分け、その恩寵によって私を召されたお方が、異邦人に述べ伝えるために、私のうちにみ子を啓示しようと思召したとき、直ちに私は血肉に誇らず、】

ルカによる福音書１章41節【エリザベトがそのあいさつを聞いたとき、胎内の子はおどり、彼女は聖霊に満たされて声高く言った、】